*Emi Norimatsu*

# *Soprano Recital*

乗松恵美　ソプラノリサイタル

（博士学位申請リサイタル）

2014年11月7日　18：00開演

日本福音ルーテル賀茂川教会

プログラム

**第１部　山田耕筰　歌曲作品集　　～こうさく少年のおはなし～**

赤とんぼ
中国地方の子守歌
からたちの花
待ちぼうけ
鐘が鳴ります
この道

（休憩 15 分）

**第２部　尾上和彦　作曲　山田数子の詩による《慟哭》**

（休憩 15 分）

**第3部　オペラアリア集**

G. プッチーニ

《ラ・ボエーム》より　　～私が街を歩くと

《ジャンニ・スキッキ》より　　～私の大好きなお父さん

G. ドニゼッティ

《アンナ・ボレーナ》より　　～私の生まれたあのお城

## 第1部　山田耕筰　歌曲作品集　～こうさく少年のおはなし～

赤とんぼの飛ぶ山里にひとり立つ少年「こうさく」は、優しい思い出に励まされ、切ない失恋を経験しながら、時を過ごして行きます。幼子から少年、青年へと成長し、やがて人生をふりかえる年齢になったとき、彼の目に浮かぶ風景は・・・

日本を代表する作曲家、山田耕筰（1886-1965）の日本歌曲を集め、オリジナルの創作物語と共に、曲をご紹介いたします。

（注：この創作物語はフィクションであり、山田耕筰さんの人生を物語として描いたものではありません）

### 1. 赤とんぼ　（三木露風　作詩）

夕やけ小やけの　赤とんぼ
負われて見たのは　いつの日か

山の畑の桑の実を
小篭に摘んだは　まぼろしか

十五で姐やは　嫁に行き
お里のたよりも　絶えはてた

夕やけ小やけの　赤とんぼ
とまっているよ　竿の先

### 2. 中国地方の子守歌　（岡山県西南部民謡）

ねんねこ　しゃっしゃりませ
寝た子の　かわいさ
起きて　泣く子の
ねんころろ　つらにくさ
ねんころろん　ねんころろん

ねんねこ　しゃっしゃりませ
きょうは　二十五日さ
あすは　この子の
ねんころろ　宮詣り
ねんころろん　ねんころろん

宮へ　詣った時
なんと言うて　拝むさ
一生　この子の
ねんころろん　まめなように
ねんころろん　ねんころろん

### 3. からたちの花　（北原白秋　作詩）

からたちの花が咲いたよ
白い白い花が咲いたよ

からたちのとげはいたいよ
青い青い針のとげだよ

からたちは畑の垣根よ
いつもいつもとほる道だよ

からたちも秋はみのるよ
まろいまろい金のたまだよ

からたちのそばで泣いたよ
みんなみんなやさしかつたよ

からたちの花が咲いたよ
白い白い花が咲いたよ

## 4. 待ちぼうけ　（北原白秋　作詩）

待ちぼうけ　待ちぼうけ
ある日せっせと　野良かせぎ
そこへ兎が飛んで出て
ころり　ころげた　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ
しめた　これから寝て待とか
待てば獲ものは　駆けて来る
兎ぶつかれ　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ
昨日　鍬とり　畑仕事
今日は頬づえ　日向ぼこ
うまい伐り株　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ
今日は今日はで　待ちぼうけ
明日は明日はで　森のそと
兎待ち待ち　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ
もとは涼しい黍畑（きびばたけ）
いまは荒野の箒草（ほうきぐさ）
寒い北風　木のねっこ

## 5. 鐘が鳴ります　（北原白秋　作詩）

鐘が鳴ります
かやの木山に

山は寒空
遠茜

一つ星さへ
ちらつくものを

なぜに
ちらりとも　出て見えぬ

## 6. この道　（北原白秋　作詩）

この道はいつか来た道
ああ　そうだよ
あかしやの花が咲いてる

あの丘はいつか見た丘
ああ　そうだよ
ほら　白い時計台だよ

＊＊＊

あの雲もいつか見た雲
ああ　そうだよ
山査子の枝も垂れてる

## 第2部　尾上和彦作曲　山田数子の詩による《慟哭》

ヒロシマの悲劇を描いた数多くある詩の中で、「子を亡くした母の嘆き」を綴った山田数子の詩集『慟哭』は、世界に広く知られている原爆文学作品の一つです。

詩人山田数子（1923-1986）は広島に生まれ、結婚後、夫と長男の 3 人市内の榎町で慎ましく幸せな家庭を営んでいましたが、そこに全てを壊す 1945 年 8 月 6 日原爆投下の日が訪れます。被爆当時、妊娠八か月であった数子は、お産のために長男泰（やすし）を連れて市外の実家に居たため、運よく難を逃れました。しかし原爆により夫を亡くし、その心痛により早産した次男昇二（しょうじ）も生まれてひと月ほどでこの世を去りました。夫と次男を相次いで亡くしたショックで衰弱した数子は、結核の病にかかったため療養所に入らねばならず、長男泰（やすし）とも離れて暮らすことになってしまいます。人里離れた山奥の療養先の病院で数子は、日毎に募る孤独の痛みに耐えながら、毎日病院で出される薬の包紙に、吾が子への溢れる思いをひと言ひと言綴って行きました。そうして書きためられた詩集が『慟哭』です。

「しょうじよう、やすしよう・・・」

詩の発表当初、吾が子の名を呼び続けるのみの内容が、詩と呼べるのか、という論議も起こったそうですが、愛しい吾が子の名を呼ぶ母親の声には、どんな言葉にも表すことの出来ない母親の痛み、孤独、愛、悲しみ、全てが余すことなく表現されているとして、国内外を問わず高い評価を得ています。

作曲者の尾上和彦（1942-）は奈良県に生まれ、17 歳の時、既にヒロシマを題材にした作品を発表しました。その後も彼はライフワークの一つとして多くのヒロシマ作品の創作を続け、オラトリオ《鳥の歌・ひろしま》は尾上和彦の代表的な作品となっています。山田数子の詩『慟哭』の、母親の嘆きに強く引き込まれたという尾上氏は、歌曲集《慟哭》の中で、嘆きや叫びを描く以上に「痛みを抱えた魂の解放」を表現したと言います。歌曲集《慟哭》は、痛みや嘆きの中にも、あちこちに「母の愛」が散りばめられた、苦しいほどに切なく、さらに人の魂のあたたかさを感じる作品です。

ただ、この曲の中で、母の嘆きが解決することはありません。それは「不慮に子を喪う母親の悲しみ」が世界から消えていないこと、我が子を亡くした母の嘆きを解消する術はどこにもない、ということなのでしょうか。しかし終曲で表現される混沌の音の渦の中には、生まれ変わろうとする喪われた魂が息づいており、それこそが「痛みを抱えた魂の解放」を表現しているのかもしれません。

### 山田数子作詩（尾上和彦 編）《慟哭》

**Ⅰ.**

**逝った人は　かえってこれないから**
**逝った人は　さけぶことができないから**
**逝った人は　なげくすべがないから**
**生き残った人は**
**生き残った人は**
**どうすればいい**
**何がわかればいい**

**Ⅱ.**

**めぐりめぐって　たずねあてたら**
**まだ灰があつうて**
**やかんを拾うて　もどりました**
**やかんがむしょうに　かわゆうて**
**むしょうにかわゆうて**
**さすっておりました**

**Ⅲ.**

**坊さんが来てさ**
**黒い着物を着てさ**
**鐘を鳴らし始めると**
**母さんに見つめられて**
**明るい燈明の下で**
**おまえたち　照れているのさ**
**糸水仙の匂う下で**
**ちょっと　泣きそうなのさ**

Ⅳ.

よその国から　偉い人が来て
橋のような墓を建ててくれたげな
「安らかに眠ってください」　いうたげな

　「かあさーん」
　呼んでいる

まだようねんと
今夜もわたしと歩くんかい
もうねたかい
まだかい
はようねてくれよ

Ⅴ.

花屋の前を通ると
花たちが　いっせいに　こっちをみるの
チュウリップも　スイトピーも
アネモネも　ヒヤシンスも
それからフリージィヤも
みんな手を出して　連れて帰ってくれという
母さんに抱かれたいという

Ⅵ.

からすが　なきなき　かえったよ
みいちゃんちに　明かりがついた
さあちゃんちに　明かりがついた
しょうじんちに　明かりをつけよ
やすしんちにも　明かりをつけよ
（しょうじ＝次男、やすし＝長男）

Ⅶ.

街にあったかい　灯がともるようになった
ふかふかふかしたてのパンが
陳列棚に並ぶようになった
中学の帽子が　似合うだろう
食べさせてやりたい
食べざかりだもんね
食べさせてやりたい
腹いっぱい　食べさせてやりたい

　しょうじよう
　やすしよう

　しょうじよう
　やすしよう

　しょうじよう
　やすしよう

　しょうじい
　しょうじい
（やすし＝長男、しょうじ＝次男）

Ⅷ.

風さん　風さん
あなたが世界中をくまなく吹いて
どこかでわたしの子どもを　見かけたら
わたしが待って待って　待ちくたびれて
それでもまだ待って　まっているからと
あの子に伝えてくださいな

つばめさん　つばめさん
あなたがいた　南の国にもしや
かえるのを忘れて　あの子があそんでたら
わたしが待って待って　待ちくたびれて
それでもまだ待って　まっているからと
あの子に伝えてくださいな

注：この詩は、1974年出版『世界原爆詩集』に掲載された山田数子の詩集『慟哭』を基に、作曲者尾上氏の手により改編されたものです。本日の演奏では、詩の内容をよりわかりやくご紹介するため、省略された原詩の一部を字幕で*斜字にて挿入表示*いたします。そのため、演奏中の音と字幕表示の内容が異なる場合があります。言葉の奥に隠れた詩人の想いを感じ取っていただけますと幸いです。

第３部　オペラの名曲から

G.プッチーニ作曲　オペラ《ラ・ボエーム》(1896年トリノ初演、全4幕) より

## 第2幕より　ムゼッタのワルツ “ 私が街を歩くと ”

物語の舞台は19世紀のパリの街。若き芸術家たちが貧しいながら自由な生活を謳歌しています。クリスマスの夜、画家のマルチェッロの別れた恋人ムゼッタがパトロンを連れて彼の前にやって来ます。彼女はマルチェッロのことを未だ愛していますが、大好きな彼を前にして、なかなか素直になることが出来ません。そしてそれはマルチェッロも同じだったのです。彼に振り向いてもらおうと悪戯な仕草で騒ぎを起こすのに、意地を張ったマルチェッロは一向に振り向いてくれません。

そこでムゼッタは彼女の最大の武器を披露します。

「私が街を歩くとね、街中のオトコたちがみんな私の美しさにクギづけになるのよ！」

そう、彼女は、とても美しく、魅力的なのです。

彼女が通りがかるだけで溜息をもらし、彼女が一目笑顔を向けるだけで、虜になる、街の男性たち。

しかし彼女の本当の望みは、街中の男たちの心を独り占めすることではありません。

「あなただって私を前にしたら本心を隠していられないはずよ、
だって、私のこと忘れられないんでしょ！」

大好きなマルチェッロにイタズラな笑顔で発したムゼッタの言葉は、「あなた」と「わたし」をひっくり返した、彼女の恋心そのものなのでした。

G.プッチーニ作曲　オペラ《ジャンニ・スキッキ》(1918年ニューヨーク初演、《三部作》の最終章) より

## ラウレッタのアリア “ 私の大好きなお父さん ”

13世紀のフィレンツェ、大富豪ブォーゾ家の遺産相続騒ぎを治めるために呼ばれたのは、町一番の知恵者ジャンニ・スキッキ。しかしブォーゾ家の親戚たちはジャンニ・スキッキを貧しい田舎者と蔑んでおり、ブォーゾ家の親戚たちとジャンニ・スキッキは犬猿の仲でした。

さて、そんな大人たちのもつれた人間関係とは無縁の若人達、ブォーゾ家の若者リヌッチョとジャンニ・スキッキの愛娘ラウレッタは恋人同士。自分の取り分の遺産をもらって何とか結婚したいリヌッチョとラウレッタは、ジャンニ・スキッキに協力を頼むのですが、

「ブォーゾ家の奴なんぞに可愛い可愛い愛娘を嫁がせるなんて、
とんでもない！！絶対許さん！！！」

お父さんは怒って娘の結婚に大反対します。

そこで一計を案じるのが、娘ラウレッタ。

「あのね、だーーいすきなお父さま、わたしね、お願いがあるの...」

・・・いつの時代も、父親は、可愛い娘のおねだりには叶わないのです。

G. ドニゼッティ作曲　オペラ《アンナ・ボレーナ》（1830年ミラノ初演、全2幕）より
第2幕より　アンナ 狂乱の場～フィナーレ

## “ 私の生まれたあの城へ ～ 邪悪な夫婦よ ”

16世紀イングランド国王ヘンリー8世（伊語名：エンリーコ）とその2番目の王妃アン・ブーリン（伊語名：アンナ・ボレーナ）の史実に基づく悲劇。

漁食家の悪名高い国王エンリーコは、最初の王妃を廃位し、アンナを2番目の王妃として迎えたものの、その愛は既に別の女性へと移っていました。アンナと離婚したい国王は、彼女に不義密通の濡れ衣を着せ、罪を詫びるなら離婚することを条件に命だけは助けてやると告げますが、誇り高いアンナは身に覚えのない罪を断固として認めようとせず、ついに投獄されてしまいます。

幽閉された牢獄のなかでアンナが思い描いていたのは、国王のことではなく、幼いころ過ごした故郷の風景でした。死を待つのみの辛い境遇の中で、幻想の世界に入っていくアンナに見えるのは、王妃として人生最大の栄誉を得た日の喜びから、次第に故郷の風景、柔らかなみどり、水面輝く川の囁きに心を馳せたとき、自分の隣にいるのはかつて淡い恋心を寄せた幼馴染ペルシーの姿でした。野心も権力欲もなく、ただ惹かれあう相手の側に居ることが出来た昔の自分に想いを馳せ、もう一度だけその場所に帰りたいと願うアンナ。しかし無情にも、牢獄の窓の向こうから新しい王妃の戴冠式の高らかなファンファーレが響き渡ります。

「邪悪な夫婦よ、復讐心の極みではあるが、
私は呪いの言葉ではなく、赦しを持って己の墓穴へと降りて行きましょう」

最期の瞬間までイングランド王妃としての誇りを失わず、高貴な立場の者としての徳と慈悲を堂々と宣言した後、アンナは処刑台へと向かい、オペラは幕となります。

## 乗松恵美 *Emi Norimatsu* ソプラノ

広島市出身。東京藝術大学音楽学部声楽科ソプラノ専攻卒業。同大学大学院独唱科修了。現在、京都市立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程在学中。マダム・バタフライ国際コンクールin長崎優勝。ひろしまフェニックス賞、広島文化賞新人賞受賞。広島市市政120周年記念式典に於いて、ソプラノ独唱。2009年テグ市（韓国）国際オペラフェス ティバルに招待歌手として参加。(財)地域創造公共ホール音楽活性化事業、平成22, 23年登録アーティスト。現在、同事業の支援事業アーティストとして継続登録。声楽を、木原朋子、瀬山詠子、朝倉蒼生、高丈二、ウーヴェ・ハイルマン、折江忠道の各氏に師事。モーツァルト「レクイエム」「戴冠ミサ」、ヘンデル「メサイア」、ハイドン「ネルソンミサ」、メンデルスゾーン「ラウダシオン」、ベートーベン「第九」「ハ長調ミサ」他、合唱曲のソリスト、オペラ では、ヴェルディ「椿姫」ヴィオレッタ、「仮面舞踏会」アメーリア、プッチーニ「蝶々夫人」蝶々さん、「ラ・ボエーム」ミミ、「修道女アンジェリカ」アンジェリカ、モーツァルト 「フィガロの結婚」伯爵夫人、「魔笛」パミーナ, 侍女Ⅰ、「ドンジョヴァンニ」ドンナエルヴィーラ、ドニゼッティ「愛の妙薬」アディーナ、ビゼー「カルメン」カルメン, ミカエラ、レオンカヴァッロ「パリアッチ」 ネッダ、J. シュトラウス「こうもり」ロザリンデ、プーランク「カルメル会修道女の対話」メール・マリー、芥川也寸志「ヒロシマのオルフェ」若い娘のちに看護婦、ジョルダーノ「メーゼマリアーノ」シスター・パツィエンツァ、などで出演。キングレコード「越天楽のすべて（'02年レコード大賞受賞）」でソプラノソロを務めCDデビュー。2013年、ファーストソロアルバム「consolo~コンソーロ」をリリース。現在、故郷の広島を拠点に、各地で演奏活動を行う。日本演奏連盟会員、日本音楽学会会員。ミリオンコンサート協会所属。NHK文化センター講師、エリザベト音楽大学非常勤講師。

## 北林聖子 *Seiko Kitabayashi* ピアノ

広島県大竹市に生まれる。ノートルダム清心中学・高等学校卒業。エリザベト音楽大学ピアノ科を卒業。エリザベト音楽大学大学院修士課程を修了後イギリスに渡り、英国王立音楽院大学院演奏家コースのディプロマを取得。現在は広島を中心にソロ、室内楽のピアニストとして活動中。作曲、編曲も手掛け、「夏の日のＤＡＭＩＮ」「斜陽～太宰への恋文」など室内楽の作品を発表している。また、多ジャンル音楽集団ムチャチョスにおいてピアノと編曲を担当し、アニメの主題歌、演歌、クラシック、タンゴなどを独自の手法でアレンジ・演奏し、幅広い年代層から親しまれている。１９９９年、２００４年、２００７年にリサイタルを開催。特に２００７年に演奏したバッハのゴールドベルク変奏曲は高い評価を得ている。２００８年にはマンドリン奏者新井義悠氏のＣＤアルバムにてピアノ伴奏を担当。２００３～２００５年まで岩国短期大学講師。現在はエリザベト音楽大学ピアノ科非常勤講師、中国新聞文化センター講師を務めている。